酒呑童子山地域の気候

大分県の西部，標高1100～1200mの山々が連なる酒呑童子山地域の気候の特徴は，雨の多いことです。平均して年間に3200～3500ミリも降ります。大分県北部の沿岸地域，たとえば中津市あたりでは年間1500ミリぐらいですから，この２倍以上降るわけです。その雨も梅雨期の６～７月に集中しています。この時期，東シナ海から入ってくる湿った南西の風が，山に吹きつけて上昇気流を起こすからです。

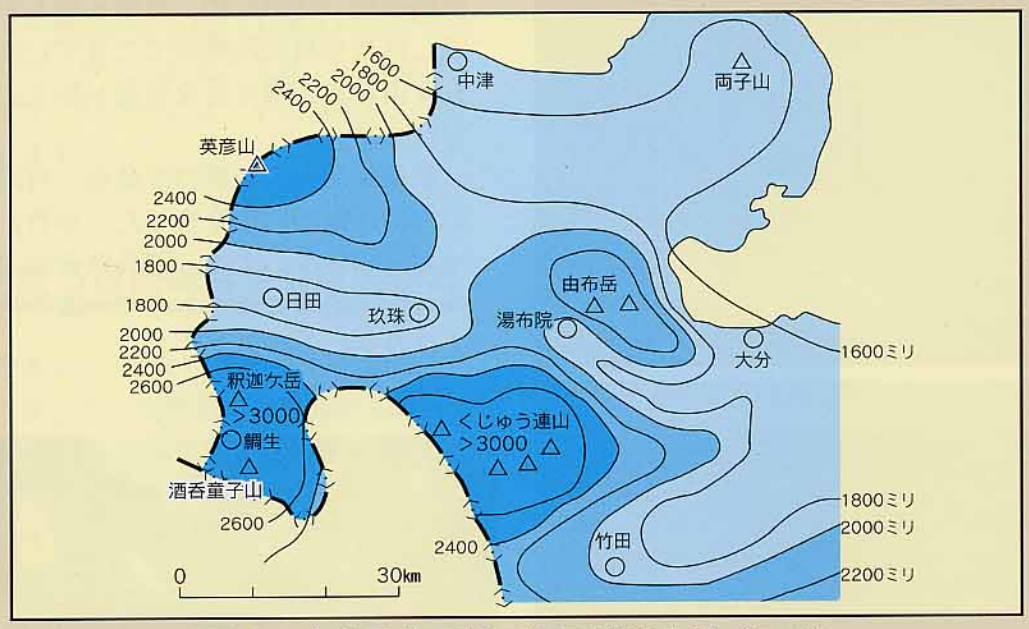


図１．大分県北西部の年平均降水量（ミリ）

図１.には，大分県北西部の年平均降水量分布が示してありますが，日田・玖珠の盆地から釈迦ヶ岳や酒呑童子山に向けて急激に増えている状況がわかります。また**図２.**は月別降水量のグラフで，鯛生と中津を比較してあります。鯛生（酒呑童子山の北西にある旧金鉱山の集落）では年平均3200ミリほど降りますが，６～７月の月平均降水量は600ミリを超え，６月から８月までの３カ月間で，年間の半分ほどが降ります。しかし，９月ごろの台風期の雨量は，比較的少なくなっています。

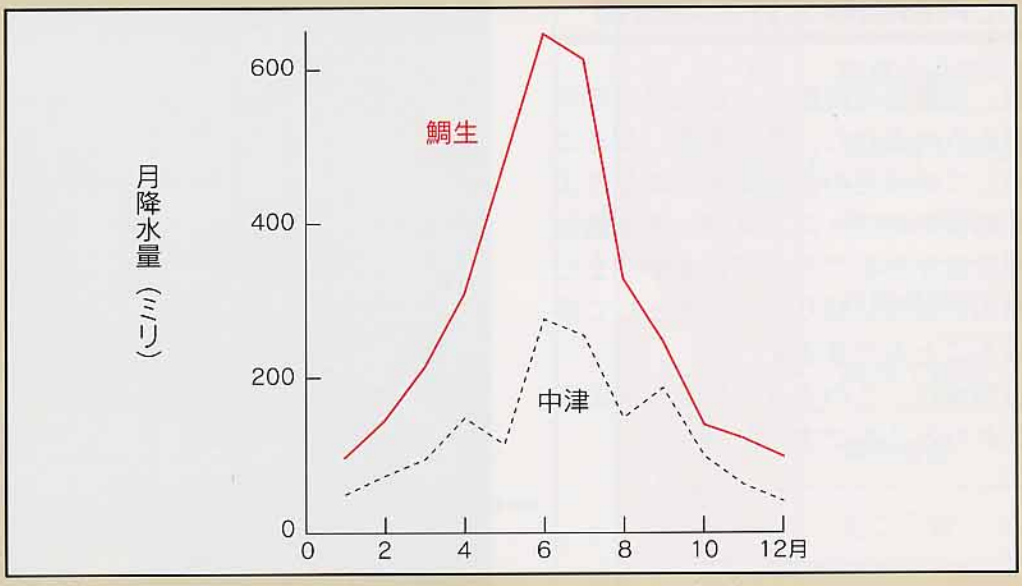


図２．月平均降水量（鯛生と中津）

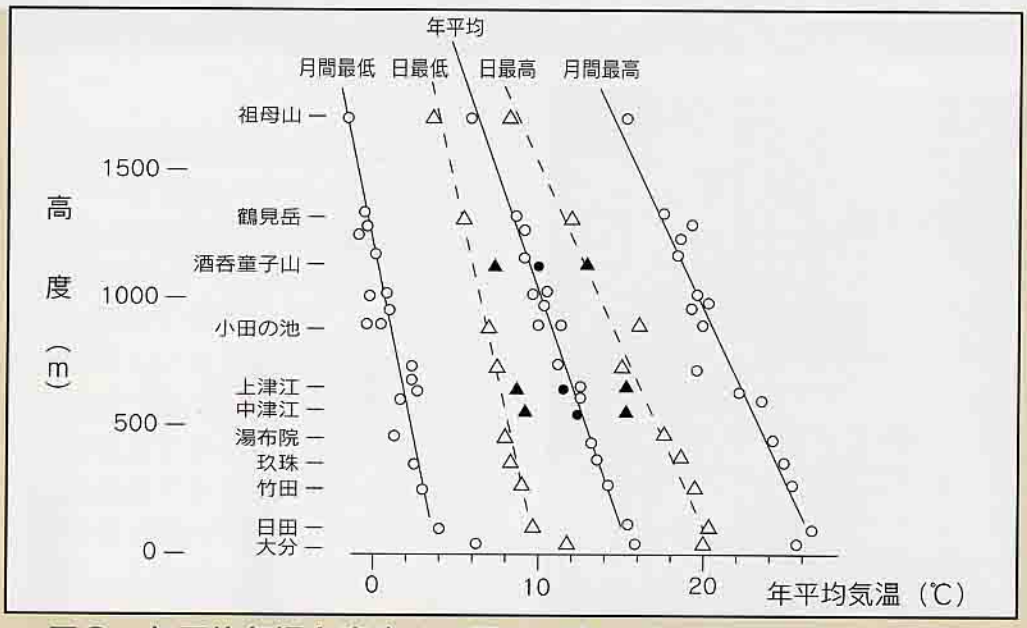


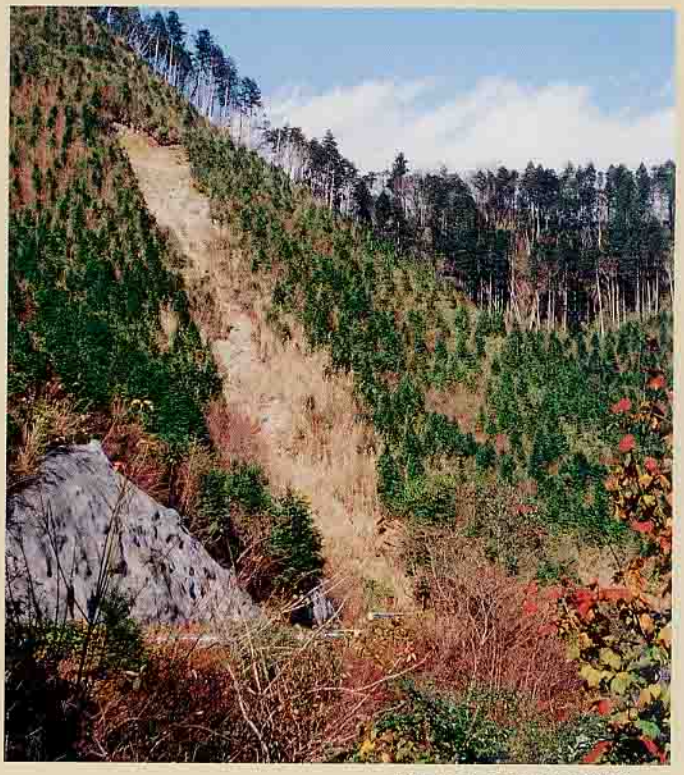
図３．年平均気温と高度との関係（●及び▲は酒呑童子山地域）

この地域は冬季になると，北西季節風の影響を強く受けて曇りやしぐれの日が多くなり，山地ですから積雪もしばしば起こります。もともと，標高の高い山岳地域では気温が低いのですが，**図３**.にあるように，日中の気温は100m上がるごとに0.8℃も下がります。ところが，夜間の気温は平均して0.4℃ほどしか下がらず，山頂付近の夜の冷え込みは比較的少ないのです。しかし，雨が降ったり季節風が吹いたりする時には，山の上も寒くなります。年間を通じて平均すると，気温の下がる割合は100m上がるごとに0.6℃ぐらいです。

晴れた日の昼間は，山の南斜面は日射を受けて北斜面よりも暖かくなり，湿度は南斜面で低く北斜面で高くなります。夜になると，気温は斜面の向きには関係なく下がり，湿度は全体的に上がります。山頂付近では，全般的に湿度が高くて雲ができやすく，降水量も多いのですが，晴天が続くと，夜も湿度が低く乾燥することがあります。

今回の調査では，梅雨期の湿った風の吹きつける山の南西側斜面の降水量が，風下の北東側斜面よりも15%ほど多いことがわかりました。この地域は，梅雨時の大雨による洪水や山崩れ・土石流などの災害が起こりやすいので，保安林を育てることが大切です。

森は山肌を護り，雨水を地下に多く貯え，山崩れや洪水を防ぐはたらきをします。平成３年９月の台風19号では，強い南西の風によって山腹の森林が一部被害を受けました。その森がもとの美しい姿を取り戻すには，長い年月がかかるでしょう。



大雨による山肌の崩落